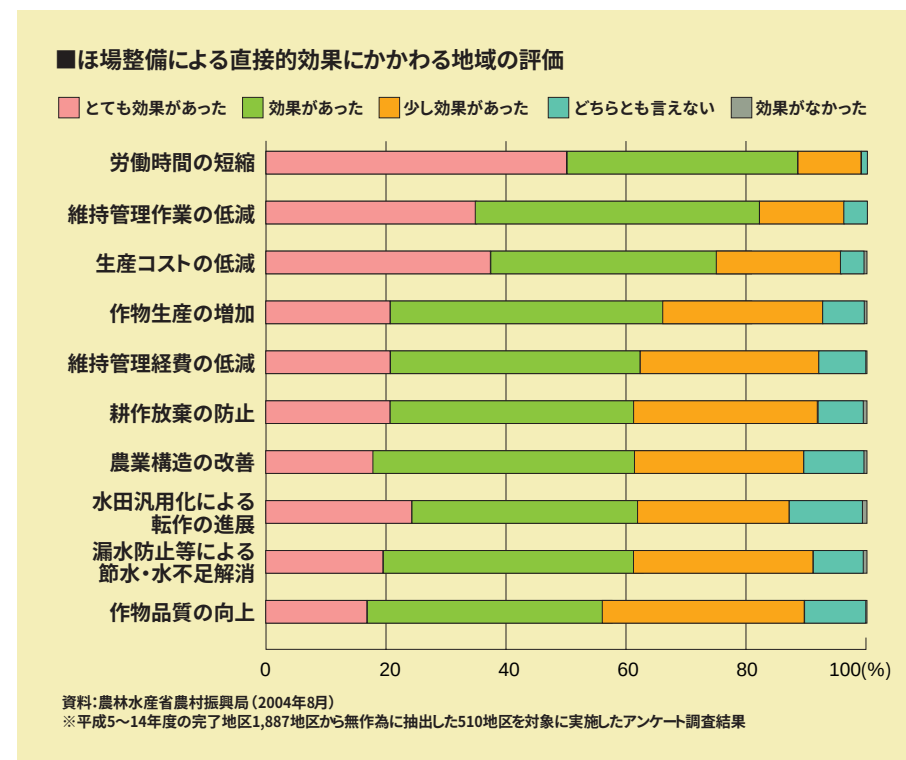


農地を整え 農を未来へつなぐ

実り豊かに、確実に——^{じょう}ほ場整備

日本の農業を未来につなぎ、持続させるためには、農地の整備が不可欠です。1963年に制度化されたほ場整備事業。分散する農地を集約させ、広く四角に整形し、大型機械の導入を可能にしました。同時に用排水路を整えることで水管理の手間を減らし、農道も整えてきました。その結果、作物の生産量は伸び、作業効率は格段に良くなったのです。

ほ場整備が終了した地区で行ったアンケートから、整備のプラス効果が見えてきます。図のような直接的効果以外にも「水路・農道管理など集落管理の機能向上」「洪水被害の軽減」や「良好な農村景観の形成」といった間接的効果も大きく上げられています。



営農条件が良好に → 耕作放棄地の減少



^{こうさくほうち}耕作放棄地[※]が発生する主な理由は何よりも高齢化・労働力不足。そして農地の立地場所が悪く、農道がないなど条件が不利なこと。しかし、ほ場整備を行い、営農条件を良くすることで耕作放棄地の発生が抑えられています。

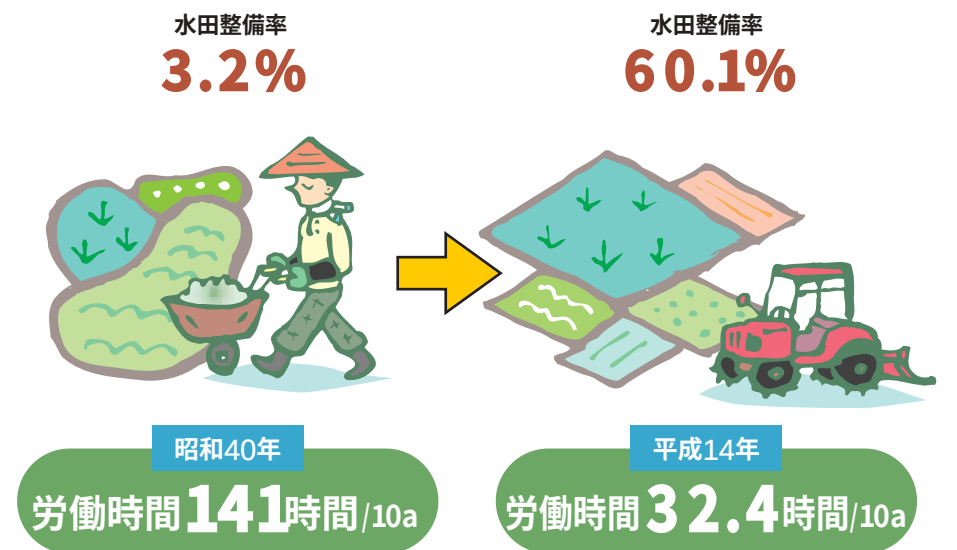
2003年、ほ場整備事業完了後10年が経過した146地区（受益面積23,953ha）において、耕作放棄地の発生状況を調査しました。すると、全国の水田耕作放棄率が3.6%（2000年）に対し、ほ場整備を終えた146地区の放棄率はわずか0.2%（45ha）でした。整備をしたことで耕作放棄地の発生が18分の1にとどめられたのです。

※耕作放棄地：過去1年以上、作物を栽培せず、今後も耕作する予定のない土地のこと。

労働時間の短縮 → 生産コストの縮減 → 消費者への還元

整備されていない水田は、狭小で水はけも悪いため、大型機械で作業することはできません。1965年、水田整備率が3.2%だった時代、労働時間は141時間でした。しかし整備率が60.1%にまで伸びた2002年、労働時間は32.4時間。労働時間は4分の1以下に減っています。

ほ場整備は農地を改良するだけでなく、農道や用排水路を整えるなど総合的に行われます。これによって作業効率がアップし、労働時間が短縮できるのです。生産コストが下がることで作物の値段も抑えられ、結果的に消費者に利益還元されています。

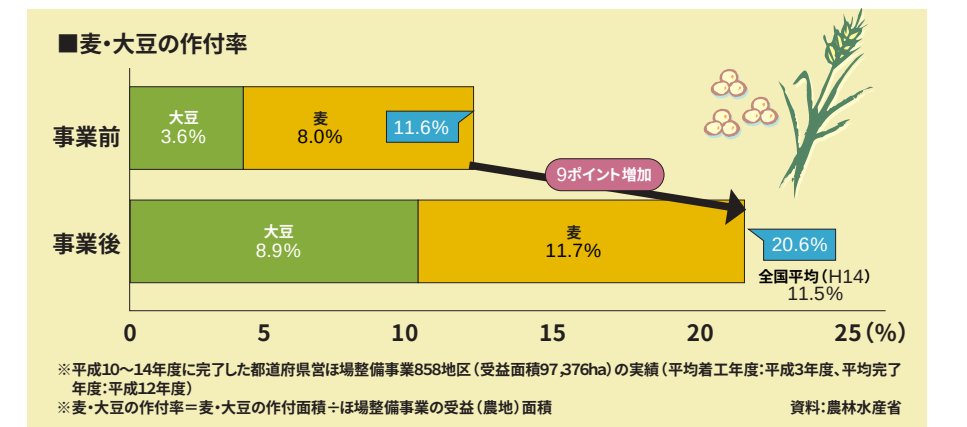


資料：農林水産省「米及び麦類の生産費」、「土地利用基盤整備基本調査」等
※水田整備率とは、水田面積に占める30a区画以上整形済み、面積の割合で、各年、年度当初（4月1日）の数値である。

水田を幅広く活用 → 麦・大豆の生産も。自給率アップ！

水はけの悪い水田には、^{あんきょ}暗渠など排水を良くする整備も行います。その結果、水田を容易に乾燥させることができ、畑としての利用が可能になります。整備済みの水田は、転作して麦や大豆をつくるなど利用の幅が広がるのです。整備によって水田の汎用化が高まると、耕地利用率[※]も上がる上に、食料自給率まで上がるというプラス効果もあります。

※耕地利用率＝延べ作付面積÷対象地区内の農地（事業後は受益）面積



深水かんがいが可能に → 冷害に強く、雑草を抑制

ほ場整備によって、漏水が減り、あぜが高くなることで「深水かんがい」が可能になります。水深を幼穂（^{こうも}稲穂の子ども）形成期に約10cm、穂ばらみ期に約20cmに保つことで、冷害を回避することができます。水深を深くして幼穂を水のなかで過ごさせ、冷たい外気から守るのです。

また深水かんがいは、ヒエなど雑草が生えにくいこともわかってきました。田植え直後から30日間、8cm以上の水位を保っておくと、地中の種は発芽できず、たとえ表層の種が発芽しても根を伸ばせず抜けてしまうのです。除草剤を使

わない水田には多様な生きものが復活するほか、ほ場整備により、あぜが高くなることは、ダムの働きをする水田の多

面的機能を飛躍的に向上させるなどの優れた効果があります。

